

# 3.11 静かに祈り捧げる

## 県外避難者支援メンバーら

東日本大震災から10年が経った。3月11日、追悼イベントが行われてきた京成津田沼駅前南口広場には、震災による「被災地を決して忘れない」と県外避難者



3月11日、黙とうする人たち  
(京成津田沼駅前南口広場)

場の片隅には小学生たちが被災地の復興を願い、県外避難者を励まそうと応援の言葉を書いた手作りキャン

ドルと、10本の竹灯りが置かれた。地震発生時刻の午後2時46分の前には防災行政無線

によって宮本市長が「10年前の3月11日、東日本大震災

災が発生し、多くの尊い命が失われました。また、未だに2500名を超える方が、行方不明となっております。さらに4万人を超え、被災者が全国で避難生活を過している。亡くなられた方々の冥福と行方不明の方々が一日も早くご家族の元へと戻られること、復旧、復興を祈り、黙とうを捧げます」と放送し、地域防災と新型コロナウイルス感染症対策への協力が呼びかけられた。

昨年静かに祈った大学生の池田花於里さんは「10年前は小学6年生でした。卒業式の練習も終わり下校し、飼いだめた犬と一緒に自宅に居た時に大きな揺れがきて、机の下にもぐったものの、鳴く犬を助けに行きたいと心細かったことを覚えてます。大学生になって、自分ででき

# 3.11 あれから10年

## 石巻市での避難体験 岩井健さん

平成23(2011)年3月11日は金曜日だった。午後2時46分、宮城県三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の地震は習志野市にも震度5強の揺れをもたらした。

あの日に対する思いは人それぞれにあるだろう。市内実務にある株式会社サクラ設備代表取締役の岩井健さんは前日から宮城県石巻市にいた。石巻市は津波被害を受け、道路は寸断。その後、石巻赤十字病院のロビーは被災者であふれ、孤立状態が続いた。

3月10日から研修のため石巻市三ツ股にいました。地図で確かめると会場は海のそばで、逃げなければ完全に死んでいるところでした。研修に参加していたため、スーツ姿で逃げました。講師は独身で自分の家に来て問題ないと言われ、一緒に車で移動して彼のアパートに行きました。部屋はめちゃくちゃで中に入らず、片づける余裕もなく、この間に津波が来れば大変だ、もっと別のところに逃げようと思った。後でそのアパートは1階が水につかり、避難で

まずに取残された人は自衛隊の救出を待つことになったと聞きました。ホテルの駐車場までたどり着き、避難して来た人たちとロビーで一夜をすごそうということになりました。その時、持っていた携帯電話は圏外。講師の携帯電話は何かとつながり、その情報は、とても危ないから「もっと海から離れた石巻赤十字病院近く、向陽町に避難所があるから」と言われて、また移動しました。ホテルの駐車場まで水が来ていたそうで、そこにいけば心配で寝ていられないところでした。

しかし、避難所は満員。ひさを曲げての体育座りやうででした。そこにいた理由が、飯。避難所にはいけば飯がある。と言っても食事は高齢者と子どもたちがまず優先。次に薬を飲んでいる人と女性の順で配られました。丸一日でおにぎり一つの生活でした。

元気で地元にはいけば不自由なく食べられますが、何もなくて、ただびくびくしている、おにぎり一つでもそれはお腹が減らなかつた。津波が来ないことがわかったとしても、余震が四六時中あって、しかも尋常でないほど頻りにあつて、震度3以上のものを感じたので怖かった。グラッと来ると早く揺れが収まらないかとそれはかりを願っていました。情報が届かない中、それに輪をかけてよ

## 谷津干潟自然観察センター サバイバルに大事な5つのもの 「そなえパークの日」



サバイバルブランケットの体験

谷津干潟自然観察センターでは3月6日、「そなえパークの日」と題され、災害時に役立つワークショップなどが行われた。「そなえパークの日」は、公園が持つ防災機能のPR、地域や消防とのつながりの強化、公園から地域防災力の向上を啓発する取り組みとして各地で開催されて

谷津干潟自然観察センターでは、防災マップの展示や防災クイズなどを通じて、楽しみながら防災を学ぼうと、入口には避難所で使用されるシェルターを展示し、ロビーではクイズで防災を知る「防災すきんちゃん」の減災クイズ、「新聞紙でできるスリッパづくり」「防災プレスレットづくり」のコーナーが設けられた。秋津五丁目町の協力による秋津地区の防災の取組みと地区の防災マップが展示され、災害時に役立つロープワークや水消火器の体験も行われた。

谷津干潟自然観察センターでは、防災マップの展示や防災クイズなどを通じて、楽しみながら防災を学ぼうと、入口には避難所で使用されるシェルターを展示し、ロビーではクイズで防災を知る「防災すきんちゃん」の減災クイズ、「新聞紙でできるスリッパづくり」「防災プレスレットづくり」のコーナーが設けられた。秋津五丁目町の協力による秋津地区の防災の取組みと地区の防災マップが展示され、災害時に役立つロープワークや水消火器の体験も行われた。

ワークショップ「災害時にも役に立つ！サバイバルの5つの大事なもの」では、災害時に生存率を高める最も大切な方法が、谷津干潟自然観察センターのスタッフからわかりやすく解説された。参加した人たちは身近なもので生き残る方法を学ぶことができた。

ワークショップでは生き残るために必要な空気、水、火、食べ物のほかに「体温を保つもの」の重要性が教えられた。空気がなければ普通の人は3分ほどで命を失ってしまうが、体温を保つことができない状態では、熱中症や低体温症

などによって3時間ほどで亡くなることになる。水を飲まなくても3日間、体温を保つことができても1週間程度は大丈夫だという。人間が生きているには大事なものは空気、体温を保つこと、水、火、食料の順番となる



習志野市インフラ協議会による地域貢献事業で行われている小学校での授業で、水の大切さを伝える岩井さん

うに、福島の原子力発電所で大爆発が起こり放射能の雨が降ると人づてに知りませんでした。

習志野市インフラ協議会による地域貢献事業で行われている小学校での授業で、水の大切さを伝える岩井さん

10年経ったいま、岩井さんは被災し、人の心の温かさに触れたことを貴重な体験とし、災害への備えの大切さだけでなく「普段から友人との交流を深め、友だちを超えた仲間を増やしていく」と考えています。

習志野市インフラ協議会による地域貢献事業で行われている小学校での授業で、水の大切さを伝える岩井さん

習志野市インフラ協議会による地域貢献事業で行われている小学校での授業で、水の大切さを伝える岩井さん

習志野市インフラ協議会による地域貢献事業で行われている小学校での授業で、水の大切さを伝える岩井さん